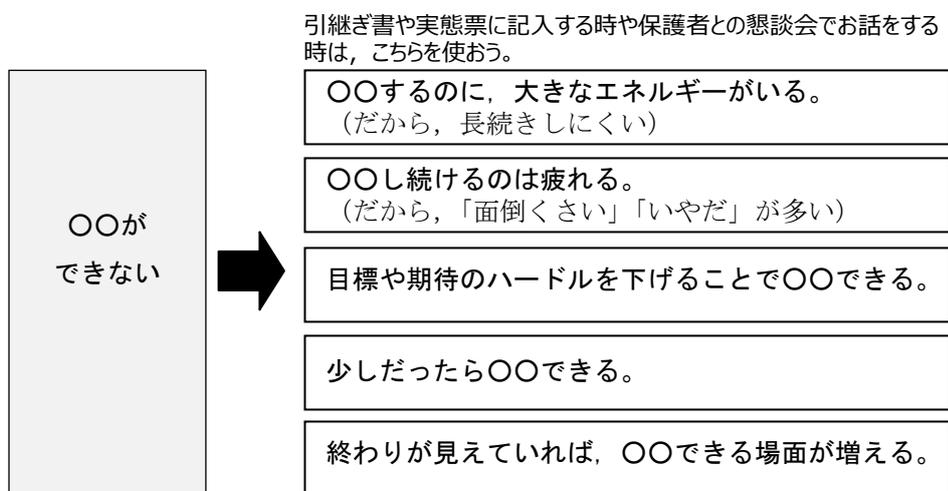


年度末になると、多くの学校で次年度の担任や担当のために「子ども理解と引継ぎの会」が行われる。本校でも様々な視点から、また長期間で捉えた子どもの様相が実態票に書かれている。しかし、気になることは、「忘れ物が多い。」「不器用である。」「落ち着きがない。」など、否定的な言葉が多く並ぶことである。

否定的な捉えが、何故よくないか。このような見方しかできなくなり、その子の良さがどうしても見えにくくなり、後付になることである。マイナスの姿ばかりを見ていくのではなく、ここから良さを読み解き（リフレーミング）、応援・支援をしていく子どもの見方に転換することが重要である。例えば、学力が低く、行動が遅い子は、時間をかけてゆっくり学ぶ子、努力をし続ける子、教師の教育技術を伸ばしてくれる子とリフレーミングできる。



リフレーミング(reframing)

ある**枠組み**(フレーム)で捉えられている物事の枠組みをはずして、違う枠組みで見ることを指す。同じ物事でも、人によって見方や感じ方が異なり、ある角度で見たら長所になり、また短所にもなる。

このような見方ができるようになるためには、子どもの言動を肯定的かつ共感的にとらえることが重要である。その子をどう見るか、子どもの言動の瞬間をどのようにとらえるか、ケーススタディで自ら鍛えることが近道かもしれない。教師の子どもたちに発する言葉も否定語より肯定語の方が改善行動に向かいやすくなることもうなずける。

引継書は何のために用意するのかを考えたい。「○○できない」「○○心がない」など、子どものネガティブな部分を断定する表現がなされている場合は、その真意を問い直したい。このような前任者からの実態は引き継ぐよりも前に、まず疑ってほしい。指導力の欠落・欠如を子どもに転嫁する実態情報は引継いでほしくない。「○○ない」の内容を見ても、眼前の子どもと対面するまでは意識の外に置きたい。自分の目や勘に、まずは頼ってみたい。この裏には、「子どもは絶えず成長を遂げている」「子どもの常に向上したいと願っている」存在と考える子ども観がある。近視眼的な捉えばかりでなく、遠視眼的に子どもの全てを見ることも、この時期だからこそ是非行いたい。(芝)